



加藤浩子『人生の午後に生きがいを奏でる家』
中経出版、2003（請求記号●J100-787）

「私の最高傑作！」 ～ヴェルディの憩いの家～

宮部 真砂子

ヴェルディ生誕200年の今年、音楽情報誌面にはヴェルディの名前が躍り、国内外の団体による彼のオペラ公演がひしめく。19世紀イタリアで《ナブッコ》《椿姫》《リゴレット》《オテロ》《ファルスタフ》など数々のオペラ名作を生み出した作曲家ヴェルディが創設した、世界でただ一つの音楽家のための老人ホームがイタリアのミラノにある。イタリアを代表するオペラ作曲家の一人として不動の地位を確立した偉大な老人ヴェルディ。彼はなぜ老人ホームの建設を考えたのだろうか。

ヴェルディは北イタリア寒村の宿屋兼雑貨屋の息子として生まれた。経済的にも音楽的にも非常に貧しい環境だった。彼は幼少時から非凡な音楽の才能を示し、近隣の町のある商人の援助を受けながら苦勞して音楽修業を続けた。しかし音楽学校受験に失敗、妻子を病気で相次いで失う、作曲家デビュー2作目オペラの大失敗で致命的な屈辱感を味わう、など青年時代は先行きが全く見えない苦難の連続の日々であった。悲劇作品が多いというのも、合点がいく。やがて永い苦役の年月を経て、精力的に作品を生み出し続け、押しも押されぬオペラ作曲家として成功したヴェルディは、彼の

周りに老後、生活の保障もなく貧困のうちに人生を終える音楽家があまりに多い事をとて嘆いていた。当時は今のよう年金の制度もなく社会保障も未整備で、多くの音楽家は悲惨な末路をたどる場合が多かった。そこで彼は晩年、私財を投じて音楽家のための終の棲家を建設した。竣工は1899年。完成した「憩いの家」をヴェルディは「私の最高傑作」と呼んだという。

「憩いの家」はミラノ北西ブオナロツティ広場（ミラノ屈指の高級住宅街）の一角に建つ。重厚なレンガ色の建物に軽やかな白い窓が並ぶネオ・ゴシック様式はヴェルディ自身の好みで約80〜100人のための居室の他、音楽練習室やコンサートホールを有している。中庭正面にはモザイク装飾が一面に施された霊廟があり、ヴェルディと妻ジュゼッピーナが静かに眠る。

施設の運営はヴェルディの死後50年までは彼が作曲した音楽の著作権料で賄われていたが、著作権消滅後は入居者の支払う施設料と寄付金で賄われている。当初は経済的な面での救済という意義が強かったが、社会全体を含め経済状況が改善された現在では、生活の安定より老後を一緒に過ごす仲間を求めて入居してくる人たちがほとんどである。音楽家が最後まで、

音楽家としての誇りを持つて人生を終えることができるようにしたいというのがヴェルディの願いであり、その精神はスタッフに受け継がれている。彼らは入居者をお客様（オスピテ）と呼び、音楽家として接している。

現在は、かつての指揮者、ピアニスト、バイオリニスト、バレリーナなど約50人の老音楽家たちが暮らし、それまで続けてきた音楽を日々奏で、歌い、あるいは趣味に興じながら、いきいきと日々を送っている。

又、「憩いの家」は近年、音楽学校の学生も受け入れられるようになった。現在約20人の学生が老音楽家たちとともに施設で暮らす。音楽練習室がある上に家賃が比較的安価なので人気が高いという。このような異世代交流は、両者にとつて意義深い事であろう。

本書の構成は、序章、第1章〜第4章「憩いの家」に暮らす人々への取材を中心とする人物・施設紹介、第5章「ヴェルディはなぜ「憩いの家」を建てたのか？終章」モタさんがあなたへ贈る「よく生きる」ための言葉―対談 齋藤茂太、加藤浩子―、別記となっている。

ヴェルディ・イヤールの今年、本書を読んで、彼の实像に思いを巡らすのも、また一興かもしれない。

●みやべ まさこ 「ヴェルディが死んだ！」という冒頭のせりふが印象的な映画。ヴェルディと同郷のベルトルッチ監督の「1900年」（本当の没年は1901年）。